

2021年9月NHK九州沖縄地方放送番組審議会

9月のNHK九州沖縄地方放送番組審議会は、16日（木）、NHK福岡拠点放送局（ウェブ開催）において、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「2021年度後半期の国内放送番組の編成」について説明があり、「番組改定について」について意見交換を行った。そして、「2021年度後半期の九州沖縄地方の番組」について説明があった後、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に10月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	古荘 貴敏	（株式会社 古荘本店 代表取締役社長）
副委員長	田川 大介	（株式会社 西日本新聞社 メディア戦略局次長）
委員	乾 眞寛	（福岡大学 スポーツ科学部 教授）
	いのうえちず	（雑誌モモト 編集長）
	楠田 喜隆	（株式会社 雲仙きのこ本舗 常務取締役）
	関西 剛康	（南九州大学 環境園芸学部 教授）
	西野 友季子	（株式会社ニュー西野ビル 代表取締役）
	吉島 夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社 5代目技術継承者 デザイナー）
	吉水 請子	（極東ファディ株式会社 取締役 商品経営本部 本部長）

（主な発言）

< 「2021年度後半期の国内放送番組の編成」

および「2022年度の番組改定」について>

- 先日の九州の大雨における災害情報を見ていて、NHKのニュースや情報発信が以前に比べ相当細かく分かりやすくなったと感じ、非常に頼りになった。今後も災害に関して、きめ細やかな発信をお願いしたい。
- 防災報道に関しては以前に比べてとても分かりやすくなったと思う。
- 公共メディアとして命と暮らしを守る情報、早くて的確な防災情報のさらなる充実を期待したい。ニュースでも「NHKニュース・防災アプリ」をよく紹介している

が、さまざまなデータや図解があって非常に分かりやすい。防災のみならず、さまざまな番組の取材メモや、理解を促す関連情報も盛りだくさんである。このアプリのさらなる周知や内容の充実にも期待したい。

(NHK側)

公共メディアは幾つか大きな柱があるが、安全・安心を守る、命と暮らしを守るといふ柱は一番目に大事にしなければいけない。有用な情報を的確に伝えるため、きめ細やかな、丁寧な取材といふ地域放送の大切な役割をこれからも果たしていく。

(NHK側)

毎年のように大雨や水害に見舞われる中、我々は日々防災・減災報道の充実に関心を砕いている。災害が発生しそうになったときの避難行動に結びつけるには、NHKのさまざまなツールをふだん使いにしてもらうことが大事だと思う。テレビ放送と併せてデジタル展開も含め、さらに力を入れていきたい。

- 新型コロナウイルスの動向は分からないが、ふるさとに戻れない状況が続くと思うので、地域を取り上げる番組は今後も引き続き放送してほしい。新型コロナウイルスに関しても地域に向き合い、前向きになれる情報を発信してほしい。見逃し配信はとてもありがたいが、高齢者などネット環境が整っていない人が置き去りにならない対応も考えてほしいと思う。
- NHKは地域に密着したきめ細かい報道をしていると感じるので、今後も丁寧な取材とそれに基づいた良質なドキュメンタリーに期待したい。

(NHK側)

若い人はドキュメンタリーや長い番組は見ないと言われた時期があったが、実はそうではなく、ネットやYouTubeでも、丁寧な深い取材の心に残るドキュメンタリーは長くてもよく見られているようだ。新しいNHKらしさの根本は、圧倒的で丁寧な取材力と、それに基づいたさまざまな番組を放送していくことだと思う。良質なドキュメンタリーも今開発しているところである。

- 若者の間でも関心が高まっている環境問題やSDGsに関する番組が増えている

ことは、とてもよいことだと思う。しかし、そのような番組があることを知っている人が少ないと思うので、SNSでの発信をさらに強化していく必要があると思う。

(NHK側)

デジタル発信など、例えばテレビを持たない若い世代にどのようにして伝えるか、模索をしているところだ。今は、コロナ禍で大きなイベントはなかなか開催できないが、リモートを活用し、新しいタイプの公開番組、公開イベントができないかも模索しているところである。放送、デジタル、リアルなイベントがうまく回ることを目指している。

- 良質な番組の存在を、多くの人に伝えるすべを模索していくことは非常に重要だと思う。時刻表の“新しいNHKらしさを追求する番組開発ゾーン”に、評価の高い番組が多くあると思うが、この新しいNHKらしさの追求にもますます期待したい。
- 経営計画の基本概念である新しいNHKらしさの追求ということばかり、今の時代に合った、よい番組が多く制作されていると感じるため、そこはぜひ継続してほしい。特に、防災意識を高める番組は非常に力が入っており、視聴者の意識も本当に高まってきたとも思う。地域情報の発信という観点でも、地域局発の興味深い番組や「グレートトラバース」などの紀行番組を通して、今まで知らなかった日本の再発見ができていると思うので、これからもぜひお願いしたい。さらに新技術の活用という観点で、東京2020パラリンピックの際に“ぴったり字幕”という実際に話している人と字幕が同時に放送されるという新技術も見たが、さまざまな人が一緒に番組を見て楽しむ工夫がされており、よいと思った。これは要望だが、さまざまなよい情報がNHKで発信され、そこで紹介された商品がどこで買えるのかを知りたいという声もある。公共放送の観点から商品名や取り扱い企業名は出せないこともあると思うが、視聴者に対する情報提供のツールがあればよいと感じた。

(NHK側)

映像に字幕をぴったり合わせることを実現するために、かなりの人数が関わっている。舞台裏も含めて紹介することも考えている。

<放送番組一般について>

- 7月19日(月)のNHKスペシャル「タモリ×山中伸弥「超人たちの人体～アスリート 限界への挑戦～」を見た。シネマティックレンダリングという映像技術を使い、人体の構造、骨格・筋肉だけでなく、内臓や脳の仕組みまで、非常に立体的な映像によって可視化されており、本当に感銘を受けた。3人の超人と呼ばれるアスリートたちの体の中に起きる変化を、科学的に解明したすばらしい番組だったと思う。人間が心理的な限界を超え、生理的な限界にいかにか挑戦していくのかというスポーツの神髄に迫る、大変深みのある番組だった。これが東京オリンピック・パラリンピックの前に放送されたことは、とてもよいタイミングだったと感じた。

- 戦後76年の今年、公共メディアとしての伝える責任を実感させる番組が幾つもあった。8月14日(土)のNHKスペシャル「銃後の女性たち～戦争にのめり込んだ“普通の人々”～」、BS1スペシャル「ヒトラーに傾倒した男～A級戦犯・大島浩の告白～」、E TV特集「ひまわり子どもたち～長崎・戦争孤児の記憶～」を見た。8月13日(金)の終戦ドラマ「しかたなかったと言うてはいかんです」も見たが、実際に起きた生体解剖事件を下敷きにした期待以上のドラマだった。これらの番組は、76年前に終わった戦争を昔の出来事として描くのではなく、現代に生きる私たちに、昔と共通する社会、人間のありようを深く見つめるよう問いかけていたと強く感じた。

E TV特集は2年前の「“焼き場に立つ少年”をさがして」の続編とも言える内容だった。原爆の投下、敗戦のときに最も弱かった存在である子どもたちの戦後をたどったもので、胸を打つ内容だった。戦後、心ない偏見・差別をうけ苦しみや悲しみの中で生きながら、復興を支えてきた人々の丁寧な証言は、平和な現代の日本を複眼的に見つめ直す貴重な機会を与えていたと思う。

- 9月5日(日)の東京2020パラリンピックまもなく閉会式を見た。腕に障害を持つ三上大進さん、聴覚に障害のある後藤佑季さん、脳性麻痺の障害を持つ千葉絵里菜さんという3人のリポーターが、今回のパラリンピックの放送において、非常に大きな力を発揮したと思う。表面的な取材だけでなく、選手たちの生い立ちや頑張りを3年半の間、丁寧に取材したと聞いた。NHKが公共メディアとして、パラリンピックを精力的に放送したことは、より多くの人に共生社会や多様性を考えるきっかけとして大きな意味があったと感じた。

- 9月8日(水)のクローズアップ現代+「目指せ！世界標準のバリアフリー▽東京

2020大会の先へ」を見た。国立競技場は、設計段階から14団体のさまざまな障害のある人が集まり、何度もワークショップを開いてバリアフリー化を図っていったことに非常に感心した。障害者に徹底的に配慮した競技場は、本当にレガシーになると思った。点字ブロックに二次元コードを入れ、スマートフォンでかざしながら歩くと音声案内が流れ、視覚障害者がスムーズに行動できるという最新技術も興味深かった。30分という短い番組だったが、丁寧に分かりやすく説明されており、これからの社会にとっても有益な内容だと思った。インクルーシブデザインということばが広く認知され、より社会が円滑に動くようになればよいと思った。

- 9月9日(木)のクローズアップ現代+「その校則、本当に必要ですか？ルール改革の最前線に密着！」を見た。多様性が叫ばれる中、生徒と先生両方からの視点や意見があり、丁寧な取材で偏りはなく感じた。一方で、保護者が学校にルールづくりを求めているという問題について、もう少し踏み込んでほしかった。親子間の形や、子育ての難しさなど、今回のテーマが保護者へ広がっていくきっかけになると思う。実際の校則見直しの動きや、大きな社会問題になっているという現実は分かったが、番組を見て、誰に、どんなメッセージで、何を訴えたいのかが少し見えづらかった。専門家の意見はあったが、実際に大人が子どもに対して何ができるのか、どのように子どもと関わっていけるのかなど、きちんと考えられる工夫や問題提起があると、今後につながっていくのではないかと思った。この番組を見て、心を動かされて行動を起こそうとする生徒が増えていくとよいと感じた。
- 9月10日(金)の長崎スペシャル「私も描き残したい～市民による100枚の『令和 原爆の絵』～」を見た。広島・長崎への原爆投下から今年で76年が経過し、原爆を知らない世代が急速に多くなっている。当時の記憶を残したい、伝えたいという強い気持ちを持つ人が少なくなってきたが、絵や体験記によって知ることができるとてもよい番組だと思った。今年の4月以降に100枚以上の原爆の絵が送られてきたことにまず驚いた。描いた人に実際に会い、どのような気持ちで描いたのかを取材したことで、より一層内容が伝わった。90歳の石本カヲさんの「うずくまったままの男の子がどうしても描けなかった、そのことをごめんと思いながら絵を描いた」ということばがとても印象に残った。原爆の恐ろしさを知り、被爆者の気持ちが伝わるよい番組だと思った。今年1月に核兵器禁止条約が発効され、来年には第1回目の締約国会議が開催される。今後も、原爆に関する特集番組の放送を続けてほしい。
- 9月10日(金)の金サガ「記録的豪雨ふたたび～被災1か月人々のいま～」を見

た。自分の周りのことで精いっぱい、ほかの地域の現状まで知る機会がなかったが、丁寧な取材と映像で知ることができ、とてもよい番組だと思った。番組を通して、現状を知ることができたが、まだまだ立ち直れずにいる地域もたくさんあると思う。被害を受けた人のために、どうすれば現状を打破できるのかといった何か手助けになるような情報が、もう少し番組で紹介されているとよかったと思う。地域住民は、引っ越さない限り毎年この恐怖と闘っていかなければならない。毎年起こる豪雨被害をなんとかして少なくしようとする県や市の取り組みや地域住民の暮らしの選択肢なども紹介すると、より多くの人にとって有意義ではないかと感じた。

- 9月10日(金)の沖縄の歌と踊り「琉球舞踊から初の人間国宝 宮城幸子 志田房子」を見た。アーカイブ映像を織り交ぜながら見せるのは、NHKならではのと思った。リアルなイベントができない今だからこそ、このような地域の芸能を取り上げる番組のありがたみをしみじみと感じ、早く舞台で見たいと思った。
- 9月5日(日)のこころの時代～宗教・人生～「光にむかって」を見た。自然災害が頻発し、新型コロナウイルスの感染拡大という未曾有の事態により、人々が閉塞感（へいそくかん）にさいなまれて苦しんでいるこの時代において、タイトルどおり希望の光を見いだすことができる番組だと思った。熊本出身の漫画家、高浜寛さんの代表作「ニュクスの角灯（ランタン）」を中心に番組が構成されていたが、この作品を生み出す背景に、高浜さんの壮絶な経験があったことを知り驚いた。絶望的な状況を克服するのに大切なのは自分の心の持ちようだという気づきが名作を生み出したことに感銘を受けた。大切な気づきを得るためには、光に向かって手を伸ばし続ける必要があり、このコロナ禍でも同じだと考える。高浜さんにとって救いとなった神学者ニーバーの「神よ、私たちに変えられないものを受け入れる心の平穏と、変えることのできるものを変える勇気と、変えることのできるものとできないものを見分ける賢さを与えてください」という有名なことばだが、コロナ禍で改めて聞く響くものがあった。特に若者が未来に希望を持ちにくい時代であるが、漫画は若者にとっても受け入れられやすい媒体だと思うので、番組も「ニュクスの角灯（ランタン）」も多くの人に見てもらい、光に向かって歩いてほしいと感じた。
- 9月15日(水)のフランケンシュタインの誘惑 科学史 闇の事件簿「ナチスとアスペルガーの子どもたち」(Eテレ 後 10:00～10:45)を見た。「フランケンシュタインの誘惑」という番組名が気になり視聴したが、想定以上に重い内容で驚いた。最初からマッドサイエンティストとうたい、見る側に意思を持って見てもらうのではなく、徐々にタイトルの意味を浸透させる意図なのか、番組名に込めたねらいが気

になった。武器の開発、AIの発展などさまざまな科学の進化の裏にある歴史から目を背けてはならないと強く感じた。良心の医師と呼ばれたハンス・アスペルガー氏が、子どもたちの生命の選別のようなことを行う一連の流れが真実なのか、何がそうさせたのかを問い続けながら見た。事実とその余白の中でどう解釈するのか、見る者が自身の視点や視座に気づく作業を伴う番組だと感じた。なぜに対する答えが明確になく、余白で残されていたのはむしろよかった。発達障害医療に生涯を投じた人の歴史でもあるので、なぜ小児科医を志したのかという掘り下げが、彼への公平な評価のためにも必要だと感じた。吉川晃司さんのナレーションは、余白を生かす意味でも持ち味が生きていたと感じた。

- 東京オリンピック・パラリンピックの影響で、戦争を取り上げた特集番組が減ったように思い残念だった。

8月23日(月)のBS1スペシャル「戦場に消えた住民～沖縄戦 知られざる従軍記録～」を見た。沖縄県中城村(そん)という、中部にある地域の住民にスポットを当て、未公開資料を基に丁寧に掘り起こした番組だった。沖縄戦では南部の悲惨な戦場が注目されがちだが、実際は中部以南はどこもひどい状態だった。メディアであまり取り上げられない中部にあえて着目しているのが非常に興味深かった。音楽も過剰ではなく、淡々としているところに好感が持て、沖縄出身の漫画家・比嘉遯さんのイラストも効果的に使われていた。これからは戦争体験者の高齢化で、生の証言を聞くことが本当に難しくなる。証言のアーカイブと未公開資料を照らし合わせ、丁寧に掘り下げたこの番組は、戦争を伝えるドキュメンタリーの今後の在り方も感じさせてくれた。

- 9月10日(金)の最後の〇〇～日本のレッドデータ～「番組MC草薨剛 日本最後の技術や文化に迫る」(BSプレミアム 後10:00～10:59)を見た。天然砥石が日本刀を通じて日本文化につながっているのはとても驚きだった。砥石採掘職人・土橋要造さんの生きざま、代々守り続けてきた思いが、映像などで丁寧に説明され心に響いた。もう一つのテーマは、消えつつある日本の在来野菜だった。番組を通して日本古来の野菜が消えていくことを知り、とても危機感を抱いたとともに日本の在来種を守る大切さを感じた。MCの草薨剛さんのゲストと向き合う姿勢や気さくなやりとりは場を和ませ、とても温かい雰囲気になった。時代の流れとともに、便利で安くて新しい物などに人が流れ、なくなったものは多いと思う。貴重な日本文化や技術を今後どのように残していくのか、さまざまに考えさせられた。多くの人に見てもらいたいので、ぜひ地上波で再放送してほしい。今回のようにあまり表には出てこない貴重な世界をこれからも多くの人に伝え、記録してほしい。

(NHK側)

戦争・平和の問題は大変重要であるが、戦争の記憶を伝える中で、情報を受け取る側の意識が随分変わってきたと思う。沖縄県のひめゆり平和祈念資料館では、戦争の情報に接してもぴんと来ない、と話す若い世代が非常に増えていることを受け、展示の仕方を大きく変えたという事例がある。同じようにメディアもステレオタイプな従来の伝え方では、なかなか若い人たちに戦争の記憶は伝わっていかないと思う。長崎の原爆の絵の事例のようにリアルなイベントと放送を、どのようにうまく連動させていくかも大きな課題だと思う。

共生社会、多様性については大上段に振りかぶるのではなく、ありのままに受け入れることを放送を通じて自然な形で知ってもらうことが大事だと思う。パラリンピックが終わったあとも、地域からの放送も含め、共生社会、多様性に重点を置いた放送を出していきたい。

NHK福岡拠点放送局
番組審議会事務局